



「お盆」とは

正式には盂蘭盆会(うらぼんえ)と言って7月13日から16日までの期間をいい、この期間に生前過ごした家に帰ってくるとされる祖霊(先祖の霊)や亡き近親者の霊を迎えて供養する行事です。

関西を初め西日本の地方では月遅れの8月13日から16日の間に行われます。

故人が逝去後初めて迎えるお盆を初盆(新盆)と言いますが、忌明け法要前や忌明け後幾日も経っていない時は、翌年のお盆を初盆(新盆)とします。特に新盆には身内や親しい方を招いて、僧侶にお経(棚経)をあげて貰うなど盛大に行われます。

13日	〈迎え火〉	お盆の初日である13日には「迎え火」を焚いて出迎えます。
14日 15日	〈盆中日〉	14・15両日には佛壇の前にお供え物で飾った精霊棚を設けて供養をします。
16日	〈送り火〉	16日には浄土への道しるべとなる「送り火」を焚いて送り出すという習わしになっています。

尚、浄土真宗では宗旨(教義)の違いにより、送り火や迎え火をしたり、精霊棚を設けるなどの習慣はありません。

昨今では、檀家一同が参集して菩提寺で盂蘭盆会の読経(仏説盂蘭盆経)を営み、僧侶の法話を聞くなどすることが一般的になってきています。

お盆の由来

サンスクリット語(梵語)の「ウラバナ(逆さ吊りの苦しみを救うという意味)」という言葉から「盂蘭盆会」といわれます。

釈迦の弟子である目連尊者という人が、実母が餓鬼道に堕ち込んで苦しんでいるのを釈迦の教えに基き、救済のための供養を営み功德をもって無事成仏させたという「仏説盂蘭盆経」からきています。

精霊棚

盆棚ともいい、古くは内庭や座敷に大きな精霊棚を作って先祖の霊をお迎えしていましたが、現在では仏壇の前における程度の小さな台を用いてお飾りするのが一般的です。精霊棚には、位牌・盆花・線香立て(香炉)・ろうそく立て(灯明台)・リン(かね)を初め、精進料理・季節の野菜や果物・水入れ(浄水の器)・小餅・白玉だんご・素麺・菓子などととも、キュウリで作った馬とナスビで作った牛を並べます。

「キュウリの馬」は先祖や故人の霊が、盆提灯の明かりや迎え火の煙に導かれて迷わず馬に乗って帰ってくるとされることから、「ナスビの牛」は送り火の煙とともに牛に乗って帰っていくことからとされていますが、「往きの馬」は馬を使ってもらってあの世から一刻も早く帰ってきて欲しいとの願いから、「帰りの牛」は牛を使ってもらってあの世に少しでもゆっくり戻って欲しいとの願いが込められていると言われています。

